

# ピーター・パンと牧神「パン」

山内 暁彦

## 序

ジェイムズ・マシュー・バリー (James Matthew Barrie) の『ピーター・パン』(Peter Pan) に登場するピーターは、「パン」という大変短い姓を持っている。小説版の作品中、ウェンディ (Wendy) とピーターが名乗り合う場面では、このように記されている。

‘What’s your name?’

‘Peter Pan.’

She was already sure that he must be Peter, but it did seem a comparatively short name.

‘Is that all?’

‘Yes,’ he said rather sharply. He felt the first time that it was a shortish name.

‘I’m so sorry,’ said Wendy Moira Angela.<sup>1</sup>

ウェンディには彼の名前は「比較的短い」ように思えたと書かれているが、その通りであったろう。ウェンディは、‘Wendy Moira Angela Darling’という長い名を持っているから、彼女の感覚では、なおさら短く素っ気なく響いたに違いないからだ。そして、ピーター自身も自分の名の短さが気になったようである。ここには、そこはかたないおかしみと気の毒さとが同居している。特に、姓が「パン」とたった一音節だけであるというのは、我々日本人と同様に、普通のイギリス人の感覚でも、とても短く聞こえるだろう。しかし、作中ではピーターの名、とりわけ「パン」という姓が短いことに関する詮索は、これ以上なされることはない。そして、我々読者もいつしかピーター・パンの名をそういうものとして受け入れてしまい、何の違和感も持たなくなってしまう。「パン」という姓は、「ピーター」という名と頭韻がそろって語呂が良いということもあって、ピーター・パンは、これ以外の名ではあり得ないかのように思いなしてしまっているものだ。

しかし、よく考えてみると、「パン」という姓は、単に短いというだけでなく、

一般的な英国人の姓ではない。そして、その響きには奇妙な違和感があるのも事実だ。そこでピーター・パンについて調べてみると「パンとは牧神に他ならず、ピーターは笛を吹いて、四角四面の現世から子供たちを自由な夢の国へ連れていくのである。」という記述にぶつかる。<sup>2</sup> ピーターは牧神であるということはこのように一般向けの概説書にも書かれていることである。しかし、これ以上の説明はなく、「笛を吹いて」以降の記述も牧神とは直接関係ないように思える。また、ピーター・ミルワードの『童話の国イギリス』の「ピーター・パン」の章にも、「一方、パンとは、ギリシャの牧羊神で、劇のなかで『炉端でナイフを使って笛を作っている』ピーターのように、腰を下ろして、笛を吹く。」という説明がされている。<sup>3</sup> しかし、パンという名の由来についての考察はこれだけで、説明の重点は、パンにではなくピーターの方におかれている。

そもそも、パン（あるいは、パーン）は、牧神または牧羊神と呼ばれる、半人半獣の古代ギリシャの神であり、ピーター同様、笛の名手である。だが、少年のピーターは、牧神とはいかにもかけ離れたイメージを持っている。作者バリーはなぜ自分の劇と小説の主人公にこのような奇妙な名前を与えたのか。あるいは、ピーターの姓が「パン」でなければならない理由はあるのだろうか。そこで、バリーの作品の外に目を向けてみると、それらが書かれた当時とは、それまで忘れられていた牧神であるパンやフォーンは、様々な芸術分野において英国やヨーロッパで脚光を浴びていたことが分かる。そうした流行のさなかにあってバリーは、一見、牧神パンとはおよそかけ離れているように見えるが、仔細に検討してみれば、牧神の持つ特質をいろいろと備えているピーター・パンという人物の造形をしたのではないか。本論ではピーターの姓の由来について様々に考察をして行きたい。

## I

まずはじめに、ピーターの出自を簡単にまとめておこう。ピーターが初めて登場したのは『小さな白い鳥』(*The Little White Bird*)で、その初版は20世紀初頭1902年のことであった。ピーターが登場するのはこの大人向けの多少難渋な小説の後半の数章である。この時のピーターは、現在、多くの人々が思い浮かべるような少年ではなく、生後間もない幼児として描かれている。一方、この間に、演劇版の『ピーター・パン』が書かれ、1904年のクリスマスシーズン中(12月27日)に舞台上にピーターが出現した。その時のタイトルは『ピーター・パン：大人になりたがらない少年』(*Peter Pan, or The Boy Who Would Not Grow Up*)であったが、この時のピーターは、我々がよく知っている少年の様

子をしている。この劇の成功を受けて『小さな白い鳥』の中でピーターが現れる後半の数章は、一部の語句を改められて1906年に『ケンジントン公園のピーター・パン』(*Peter Pan in Kensington Gardens*)として出版された。この時に本の表題としては初めてピーター・パンの名が用いられている。この本は子供を読者に想定して出されたが、実際には先に出た『小さな白い鳥』と字句は大きくは変わっていないことから、子供を持つ親向けの本とでも言い得るものであった。さて、劇に基づき1911年には小説版の『ピーターとウェンディ』(*Peter and Wendy*)が出た。これは後にタイトルを変更され、『ピーター・パンとウェンディ』(*Peter Pan and Wendy*)を経て、最終的に『ピーター・パン』(*Peter Pan*)となった。小説版のタイトルの二度の変化においては、ピーターの名はそのままだが、ウェンディの名は消されてしまい、代わりに「パン」が加わっていることに注意をしたい。確かにウェンディは主要人物の一人であるが、ピーターと並んで表題に名を出すほどではないことと、「パン」という姓をピーターが持っているという事実が、結果的には強調されているのだ。さて、演劇版の『ピーター・パン』はといえば、初演の成功を受けて後に数度の上演を重ねたが、その台本自体はなかなか出ず、数多くの推敲、改変を経た後、当初の三幕物が五幕物になって1928年に出版された。現在では、上記の演劇版と小説版をとも単に『ピーター・パン』と呼ぶ場合が多いようである。また、このタイトルからは、1953年のディズニーによるアニメーションを思い浮かべる人も多いであろう。このアニメから飛び出たピーターの姿は、世界各地のディズニーランドでのアトラクションで見ることができし、ミュージカル版の『ピーター・パン』(1950年版と1954年版がある)も人気が高い。さらに、映画では、1991年のスピルバーグ監督作品である実写版『フック』(*Hook*)、同じく実写の『ピーター・パン』(P. J. ホーガン監督、2003年)などが我々の持つピーター・パン像を形作るのに寄与しているだろう。また、我が国では子供向けのテレビアニメ版『ピーターパンの冒険』(1989年放映)などもあり、原作以外のピーターからの印象の方が深いという人も多いのではないだろうか。

このようにして、バリーの原作やそれ以降のピーター関連の作品群の成立史を見て行きながら、我々が注意しなければならないのは、ピーターは、はじめの『小さな白い鳥』と『ケンジントン公園のピーター・パン』においては幼児であったのが、その後は一貫して少年に変わっていることである。そして、少年ピーターが出現して以来、彼の人物像は、劇、小説、ミュージカル、映像作品などを通じて、衣服の色や形であるとか、演者の性別であるとかの、多少の変化はあるものの、少年であるという点においては固定化されて我々の目に触れることになったと言える。ところが、一方、幼児のピーターは『ケンジン

トン公園の『ピーター・パン』を最後に、もはや我々の目に触れることはなくなってしまった。幼児のピーターと少年のピーターは、ある意味で同一人物であり、一人の人間が成長する前と後であるとも考えられないことはないが、いろいろな点で異なっていることと、そもそも別々の作品の登場人物であることなどから、二人は別人であるという解釈も可能である。そこで本論では一応両者を別人のように見なし、それぞれを「幼児ピーター」「少年ピーター」と呼んで区別することとしたい。そして、個別に牧神パンとの関係を論じて行くこととする。また、ピーター・パンはバリーの手を離れて一人歩きした感が強いが、本論ではバリーの創造したピーター・パンにできるだけ焦点をしばり、年代的には、1902年の『小さな白い鳥』の出版、1904年の演劇版の『ピーター・パン』初演から、1911年の小説版『ピーターとウェンディ』出版および1928年の戯曲の出版までを中心に論じたい。

## II

まずは、パンとはいかなる神であるかを確認しておかねばならないだろう。最初に手近なところで、筆者のPCに搭載された『辞書』から引こう。それには、「ギリシャ神話の牧人と家畜の神。元来はアルカディアの神。山羊の角・鬚（ひげ）・下半身をもつ半獣神。笛の音楽舞踊を好む。昼寝を妨げられると人や家畜に突然の恐怖（パニック）を与える。ローマ神話のファウヌスにあたる。」という簡潔な定義がされている。<sup>4</sup> 次に、これも手近な参考書であるが、*Merriam-Webster's Encyclopedia of Literature*によれば、以下のようである。

**In Greek mythology, a fertility deity, more or less bestial in form. He was associated by the Romans with FAUNUS. . . . Pan was generally represented as a vigorous and lustful figure having the horns, legs and ears of a goat; in later art the human parts of his form were much more emphasized.**<sup>5</sup>

辞書的な定義だけでは不十分であろうから、次には、我々がパンについて持っているイメージを列挙してみよう。古くは、ギリシャの詩人ロンゴス（Longus）によって描かれたとされる『ダフニスとクロエ』にパンは登場する。若い二人の崇拝を一身に集め、危うい所を助けたりもする頼もしい神である。この作品では人々はゼウスなどには詣出ず、もっぱらパンやニンフたちに頼っている点が興味深い。但し、この神は多少好色であって、品のない面を多分に持ち合わせていることにも注意を要す。アラン・ダニエルー（Alain Daniélou）は『ファロスの神話』でこの面に焦点を当てて以下のように記している。

森と水を好み、呑気にして怠惰、このパンの眠りを妨げるのは禁物である。半身が人間、半身が山羊、髭を生やし、角を持ち、毛むくじゃらで、激しやすく陰険、走れば敏捷、そんな神がニンフや少年——これもまた邪心の対象であった——を待ち伏せている。飽くなき色欲の持ち主で、同時に自慰も繰り返す。<sup>6</sup>

最後の「自慰」云々は、ロシアバレエ団のバレエ作品『牧神の午後』(*L'Après-midi d'un faune*) の結末で、ニジンスキーによって遺憾なく表現され、物議を醸した点である。更にもその親とも言うべきマラルメ (Stéphane Mallarmé) の傑作『牧神の午後』(*L'Après-midi d'un faune*) で、間接的な形ではあるものの、表現されていた点でもある。

では、このような牧神と同じ名を持つピーターについて考察してみよう。まず「幼児ピーター」についてはどうか。牧神パンは先に見たように、性的に成熟した成人男性と動物の雄の合体したような形態を持つものであり、豊穣を体現する神である。彼は動物的な性的能力をあからさまに備えていて、しばしばそれを発揮している。性的には全く未熟な、生後間もない「幼児ピーター」は、パンとは全く異なっていることは明白であり、比較するのも滑稽なほどである。では、「少年ピーター」についてはどうか。彼もまた、少年とはいえ性的にはおそらく未熟であって、パンとは縁遠い存在である。何しろ彼の歯は未だに乳歯のままなのである。但し、彼の場合はいささか事情が異なっている。「幼児ピーター」には皆無と言って良いパン的な部分が、多少垣間見られるからである。それは、一言で言って、彼の言動に見られるわがままと放蕩である。ロスト・ボーイズやティンカー・ベルが自分の思うようにならない場合はかんしゃくを起こしたり、勝手気ままな振る舞いに及ぶような所が彼にはある。彼は、ネパールの専制君主なのだ。だが、こうした特徴は、パンの性質に由来するというよりはむしろ、ダン・カイリー (Dan Kiley) の「ピーターパン症候群」の説を待つまでもなく、少年期の子供特有の性質に過ぎないと考えることもできる。では、全体として、ピーターは少年であろうが幼児であろうが、いずれもパンとは関係が薄いと言って良いのだろうか。否、そうとも言い切れない。以下においては牧神パンとピーターとのいろいろな関わりの可能性を追求してみたい。まずは「幼児ピーター」の次の性質において、パンと大いに類似している点を指摘したい。それは、「幼児ピーター」がソロモン・コー (Solomon Cow) に言われる次の言葉で表現されている。

‘Then I shan’t be exactly a human?’ Peter asked.

‘No.’

‘Nor exactly a bird?’

‘No.’

‘What shall I be?’

‘You will be a *Betwixt-and-Between*,’ Solomon said, and certainly he was a wise old fellow, for that is exactly how it turned out. (17)

ここでの ‘a *Betwixt-and-Between*’ 「どっちつかずの半端者」という表現こそ「幼児ピーター」のケンジントン公園内での境遇を表す言葉であった。ソロモンは ‘*Poor little half-and-half!*’ (16) 「かわいそうな、半分鳥で半分人の子供よ」ともピーターのことを呼ぶ。ピーターは、半分は鳥で半分は人であるかのように振る舞うのだが、このことは、牧神が、上半身が人で下半身が山羊である半分半分の姿をしていることとまさに同じなのである。一方、「少年ピーター」についてはどうかと言えば、彼は彼なりに、妖精と人間の間であると言うことができ、その点では半分半分の性格を彼もまた持たされている。彼の場合も、事情は大きくは変わらないと言って良いだろう。また、「幼児ピーター」は山羊に乗っている。読者として想定される子供たちの祖母の代には、彼は山羊に乗ってはいなかったということのようだが、母親の代からは、今日に至るまで、ピーターと言えば、山羊に乗っているのが当然であるということになっている。

If you ask your mother whether she knew about Peter Pan when she was a little girl, she will say, ‘Why, of course I did, child’; and if you ask her whether he rode on a goat in those days, she will say, ‘What a foolish question to ask; certainly he did.’ (12)

こうしたことから、「幼児ピーター」と山羊の下半身を持つパンとは、存外近い関係であることが明らかである。この点は「少年ピーター」にも当てはまる。少年ピーターに関わる作品中で現行のものには劇にも小説にも山羊は現れないが、Ann Yeoman によると、かつては『ピーター・パン』の舞台上に生きた山羊が登場していた由である。

In early performances of Barrie’s play, Peter Pan appeared on stage with both pipes and a live goat. Such undisguised references to the chthonic, often lascivious and far from childlike goat-god were, not surprisingly, soon excised from both play and novel.<sup>7</sup>

しかしながら、現行の戯曲には、いろいろな動物は登場するものの、山羊は現れなくなってしまった。作中から山羊を除いた作者の意図としては、ヨーマン

の言うように、あまりにもあからさまであるからということに加えて、「幼児ピーター」と「少年ピーター」の区別を明確にしたいということもあっただろう。いずれにせよ、ピーター・パンと牧神との関係を考えてみた際、一見、両者の関係は薄く、接点がありませんように思われても、少し注意深く検討してみると、両者の関連性はいろいろな点で浮かび上がって来ると言って良いであろう。

### III

ではここで、牧神が芸術家たちによってどのように取り上げられていたかを概観すべく、当時のヨーロッパに目を向けてみよう。20世紀初頭のフランスは周知のようにマラルメに代表される象徴主義やモダニズムの思潮に覆われていたと言って良い。彼の『牧神の午後』は1865年から1867年にかけて既に書かれていたし、それに触発されて、ドビュッシー (Claude Debussy) の『牧神の午後への前奏曲』(*Prélude à l'après-midi d'un faune*, 1892年作曲、1894年初演)、ニジンスキーのバレエ『牧神の午後』が相次いで芸術界をにぎわした。さらに、ラヴェル (Maurice Ravel) のバレエ音楽『ダフニスとクロエ』(*Daphnis et Chloé*, 1912年初演)にも牧神が登場する。これは3部構成のバレエであるが、その第1部、第3部は、「パンとニンフの祭壇の前」で踊られる。第1部の終盤には、ダフニスが祈りを捧げる目の前に実際にパンがその姿を現す。更に、同時代の北欧では、ノルウェーの作家クヌート・ハムスン (Knut Hamsun) が、その名も『牧神』(*Pan*) という小説を書いて1894年に出版している。方や、オーストリアの作曲家グスタフ・マーラー (Gustav Mahler) は、1895年から1896年にかけて作曲した『第3交響曲』の第1楽章に「パンが目覚める。夏が行進してくる」 („Pan erwacht. Der Sommer marschiert ein“) との表題を付けている。パンの目覚めはオーボエによる牧歌的な第2主題で表現されている。英国では、ケネス・グレアム (Kenneth Grahame) の『楽しい川辺』(*The Wind in the Willows*) の中に牧神の島に憩う牧神が多少唐突な感じで現れる。表紙に牧神の絵をあしらった初版が出たのは1908年のことだ。<sup>8</sup>

このように、19世紀末から20世紀初頭にかけては、ヨーロッパ大陸を牧神であるフォーンとパンが席卷していたとも言い得る程であったのである。そしてこの年代については更に少し遡って考えても良いだろう。詩や小説、音楽や舞踊から、絵画に目を向けてみれば、フランスの画家ミレー (Jean-François Millet) に『牧神への捧げもの』(*Offrande à Pan*, モンペリエ、ファーブル美術館蔵) という作品がある。これは1845年に描かれたものだ。女性がパンの像に

捧げ物を差し上げている幻想的な雰囲気のある絵である。そして大西洋を越えてアメリカに目を転じれば、例えば、ホーソン（Nathaniel Hawthorne）には『大理石の牧神』（*The Marble Faun: Or, The Romance of Monte Beni*, 1860 年出版）がある。これはホーソンのイタリア滞在の体験に基づく小説でその舞台もイタリアすなわちフォーンの故郷に設定されているのだ。このように、19 世紀の後半には、ヨーロッパやアメリカで様々な芸術分野においていろいろな形態で牧神がしばしば取り上げられて来たと言い得るのだ。そしてこうした流行の中に『小さな白い鳥』以降のピーター・パンに関連したバリーの諸作品が位置づけられる訳である。

ところで、上記のいろいろな芸術作品の原タイトルと邦訳の表題とを比較して容易に気づくことがある。それは、パンとフォーンがともに「牧神」の訳語を当てられているということである。すなわち、我が国ではパンとフォーンが同一視されているのである。実際、両者は別々の者であるのだが、その形質が似通っているために混同されてしまい、両者は同一視される場合が多いのである。先に挙げた『辞書』以外では、Wikipedia でも「ローマ神話でパーンに対応するのは Faunus（ファウヌス）である」とされている。すなわち、ゼウスに対応するのがジュピターであり、アフロディテに対応するのがヴィーナスである、というのと同様だ。ちなみに、その語形を見た際には以下になるだろう。古代ギリシャではパン、古代ローマではファウヌスと称されたこの神は、年代が下るにつれて、パンの方は、多くの言語で語形と発音が保たれたままであり、一方ファウヌスは、言語によって‘faun’とか‘faune’とかに、微妙に変化しているということだ。従って、現代の諸芸術作品で描かれるパンとフォーンはともに「牧神」という同じ訳語を当てて呼んでも、結果的には大きな誤りではないということになるであろう。このことは、ある作品中に「牧神」として現れるのはパンかフォーンのいずれかであり、その両方が一つの作品内に現れることは基本的にはないことから理解できよう。

但し、英語での‘Pan’と‘Faun’とは、微妙に異なっているようだ。両者の最大の差は彼らの性格の違いにある。パンが時として獐猛に欲望の実現へ向かって行く性情を備えているとすれば、フォーンはきわめて温和であり、自分の欲望を遂げようと躍起になることはない。しかしながら、外見的には両者は大変似通っていることは事実である。仮に、もし人が森の奥などで遠方からどちらかを見つけたとしよう。大抵の人は一見しただけではそれがどちらなのか容易に判別することは困難であろう。そして突然その姿を見せつけられたらさぞびっくりするだろう。このことは、例えば、C.S. ルイス（C.S. Lewis）の『ナルニア国物語』（*The Chronicles of Narnia*）の映画第 1 作、2005 年公開の『ナルニア



国物語/第1章：ライオンと魔女』(*The Chronicles of Narnia: The Lion, the Witch and the Wardrobe*)で、主人公たちの一人である末の妹ルーシィ(Lucy)が、雪の森の中で初めてフォーンのタムナス(Tumnus)に出会う場面でもよく表現されている。はじめにフォーンの気配がし、次に特徴のある足元が一瞬写り、最後に体全体が明らかになると同時にルーシィが悲鳴を上げてしまう、という具合に登場場面が作られている。一人寂しく森の中に紛れ込んだルーシィが出会ったのが、荒々しいパンではなく、優しいフォーンであったことは、彼女にとって幸運なことだったろう。しかしながら、半身は人のなりをしていても半身は獣という姿自体は、性質がいくら穏やかだと言っても、それはそれで恐ろしい者であるには変わりはない。そもそも、パンにしてもフォーンにしても、一応は神であるとされてはいても、神、人、動物の階梯の中にじっくり収まらない奇妙な生き物であることが、人の心を動揺させる要因ではないか。パンがフォーンといかに異なっているかよりは、いかに共通するかの方に人は大きく印象づけられるだろう。今後は、その差は差として留意しつつも、ある程度は両者を同一視して考えても大きな問題はないとしておこう。更に言えば、また別の神であるはずのギリシャのディオニソス(ローマでは、バッカス)も、パンやフォーンとは明らかに姿や性質が異なっているにもかかわらず、場合によってはそれらと同一視されることが多いようである。あるいは混同されることが多いと言っても良いだろう。また、サテュロスも、神ではないものの、上半身が人で下半身が山羊または馬であることなど、パンやフォーンと共通性を持っていて、古代ギリシャ・ローマのこの種の神々の区別は近現代ではますます曖昧になっている。その理由は様々であろうが、ごく大まかに言って、キリスト教から見た場合、このような、有象無象と言っても語弊があるが、神とは名ばかりの、よく分からない異様な者たちは、その扱いを的確にしかねるということではないだろうか。謹厳なキリスト教の神の対極にある、動物じみていて酒や踊りに興じる異教の神々を扱う際には、それが誰でも大して構わないという態度を無意識的に取ってしまう結果の混同であると筆者は考えている。そして、ひいてはこれらの神々は、キリスト教の悪魔とも同一視されることになって行くのだ。

#### IV

ではここで、ピーターと牧神との関わりを考える上で、大変興味深い絵画に目を向けてみたい。それは、ウィリアム・ブグロー(William Bouguereau)の『バッカスの少年時代』(*La jeunesse de Bacchus*, 1884年、油彩、パリ、個人蔵)で

ある。<sup>9</sup> この絵の持つ面白さは、子供のバックスを中心に画面一杯に描かれた老若男女の人や半神の群像が活発に踊り戯れる中にパンを始めとして、ケンタウロスやシレノスも一体ずつ描かれていて、先に挙げたギリシャ・ローマの猥的な神々が一堂に会したかのような印象になっていることである。そして、画面右端のケンタウロスが、本来はパンが持つべき笛を持っている。その形状は吹き口が一つで音の出口が二つあるような、あるいは、管が二又に分かれたような形をした、「アウロス (aulos)」と呼ばれるギリシャ時代の楽器である。ここにもまたおおらかな混同が見られるという訳だ。この絵画には、神話の中の人物の持ち物が本来どうあるべきか、というような面倒な考証よりも、バックナールの乱痴気騒ぎの雰囲気をいかに鮮明かつ大胆に醸成するかということこそを重要視した、活人画風の描写が見られて、大変興味深い。学問としては正しい考証は必要なことであろうが、芸術作品自体はそれとは異なる場面で成立することを改めて思い知らされる例である。翻って、我々の扱っている『ピーター・パン』にしても、つい瑣末な考察にのめり込んでしまいがちであるが、観客＝読者としての正しい態度はどうあるべきかを考えた際に、一つ重要なのは、多少の不具合や違和感には目をつぶり、作品をそのままの姿で鑑賞して楽しむことだと思うのである。

先に、ピーターは牧神パンとは接点がありませんという趣旨のことを述べたが、この絵を見ると、通常は成人の姿で描かれるパンにもバックスにも、あるいはその他の神話上の神々や人物にも、それぞれに子供の時代があったはずだという当然の事実気づかされる。ピーター・パンは、事によるとブグローの描いた『バックスの少年時代』に触発されて創造されたのではないだろうか。この絵にはバックスが描かれているが、それをパンに言い換えて、あるいは思いなして、子供のバックスならぬ子供のパンを思いついたのではないかということである。ピーターの最大の特徴は、大人になりたがらぬことだ。「幼児ピーター」は幼児のまま、「少年ピーター」は少年のまま、それぞれがあり続ける、という設定なのだが、もし彼らが成長するとすれば、彼らはともに大人のピーター・パンになり得るのである。ここでいささか気になるのは、バリー自身がこのブグローの絵画や他の同種の絵画にどの程度影響されているのかということである。更に言えば、既に言及した、牧神を扱った様々な芸術作品についても同様だ。バリーがそのいずれかからどの程度影響を受けているのかについて今は判然としない。仮に、上述の色々な芸術家たちが皆英国人であったならば、問題は多少扱いやすくなるであろう。しかし、当時の芸術家同士の影響関係の有無を考える際には、情報伝達の手速と密度が現代とは比較にならない程遅く希薄であったことを勘案すれば、やはりこの点は、今後の検討課題とせ

ざるを得ない。今言えることは、生きた国は違うけれど、19世紀の末葉という同じ時代の雰囲気の中に、バリーもブグローも共に生きていたということに尽きるだろう。

では、さらに絵画の歴史を遡ってみよう。先に、ミレーの『牧神への捧げもの』に言及したが、彼の1865年の作品『春(ダフニスとクロエ)』(*Le printemps (Daphnis et Chloé)*、油彩、東京、国立西洋美術館蔵)も、ピーター・パンと大いに関連があると考えられる。<sup>10</sup> この絵には、高くそびえるパンの祭壇が背後に描かれているその前で、ダフニスとクロエが小鳥のひなに餌をやっているほのぼのとした情景が描かれている。パンの像の向って右の肩には二本の笛がかけられており、下半身を覆うように色とりどりの花々が供えられている。パンの表情は、とても朗らかで、先に挙げた『牧神への捧げもの』のパンが暗い色調の中に不気味な様子で佇立していたのと正反対である。像の傍らには親子の山羊がいて、その上方には二羽の黒い鳥が舞っている。ダフニスの持つのは、中にひな鳥のいる鳥の巣だ。遠景には海が見えている。こうした絵柄を見て行くと、それぞれがピーター・パンに関係があることが分かる。それは、『ピーターとウェンディ』の「少年ピーター」よりは、むしろ『ケンジントン公園のピーター・パン』の「幼児ピーター」の方だ。まず、パンの祭壇は、その名をピーターが負っていること、笛はピーターの持ち物でもある。花は、ピーターの周りの妖精たちが身をやつすものだし、鳥は、ピーターの友人たちだ。黒い色は、カラスのソロモン・コーを思わせる。鳥の巣はピーターがサーペンタイン池を渡る際に使ったツグミの巣ということ。遠景の海はその池になぞらえられよう。ピーターが池を舟で渡る場面では、あたかも大西洋に乗り出す航海シーンであるかのような描写がなされていたことを考え合わせても良い。また、人間であるクロエがひな鳥に餌をやっているということは、そのひなには親鳥はいないことを意味する。これは即ち、ピーターが母親と離ればなれになっている状況と相似である。そして最後に、ダフニスとクロエのカップルは、幼いピーターとメイミー・マナリング(Maimie Mannering)に相当するという具合である。

このように、絵画に描き込まれたいろいろなモチーフは、『小さな白い鳥』と『ケンジントン公園のピーター・パン』の中に数多く見出だせる。絵画の文学作品への影響は、実際にありそうなことであるし、時代的に考えても、ミレーの方が30年以上バリーに先行している。バリーはこの絵を見知っていたのであろうか。そして、それから何らかのヒントを得たのだろうか。想像は尽きない。しかしながら、我々はここでもあえてこれ以上の詮索はしないでここう。先にブグローとの件で述べたように、ミレーからバリーへの直接の影響はなく、両

作品の類似は単なる偶然であるかも知れない。両者に共通する点があるとすれば、それは、若いカップルの素朴な愛情表現ということに尽きよう。その若い男女の愛は、洋の東西を問わず、古来より、人にとって普遍的な芸術のテーマになり得るということであるだろう。『小さな白い鳥』と『ケンジントン公園のピーター・パン』の中のピーターとメイミーの間柄もそうであるし、『ピーターとウェンディ』以降の作品で描かれている、ウェンディとの関係や、場合によってはティンカー・ベルとの関係などが、これに該当するだろう。少年少女の、恋愛と呼ぶにはまだ未熟な、ほのぼのとしたつながりを、成人してしまった芸術家が自分の過去を振り返りながら、いとおしんで創作の題材とすることは、しばしばあることだろう。バリーの場合は、性的な面での成長に不具合があり、多少事情が異なりはするであろうが、男女の愛を真っ向から否定したり、それから完全に目を背けてしまっている訳ではないということには疑いはない。

## V

ミレーの絵の次には、『ダフニスとクロエ』のロンゴスの原作にも目を向けてみよう。一読して、彼らはしきりにキスのやり取りをしていることに気がつく。ここには、ピーターがメイミーもしくはウェンディとのやり取りをする際に、キスと指貫を取り違えて妙な雰囲気になる場面との類似を見出すことができる。キスを介して男女が関わりを持つという点においてロンゴスからバリーへの影響は明らかだろう。ロンゴスからの影響を考えた際、さらに興味深いのは、両者の作中で絶えず言及される笛のことである。以下においてはその楽器についての考察をしてみたい。バリーの描くピーターは、いずれも笛の名手ということになっている。特に「幼児ピーター」は、その笛で様々な音色を奏でることができ、さざ波の音から月光を表現する音まで自在に出すことができる。

Peter's heart was so glad that he felt he must sing all day long . . . so he made a pipe of reeds, and he used to sit by the shore of the island of an evening, practicing the sough of the wind and the ripple of the water, and catching handfuls of the shine of the moon, and he put them all in his pipe and played them so beautifully that even the birds were deceived, and they would say to each other, 'Was that a fish leaping in the water or was it Peter playing leaping fish on his pipe?' (18-19)

あたかもピーターは、標題音楽を奏でるオーケストラのすべての楽器をたった一人で担当しているかのようなのである。上の引用の直後の箇所には、栗の木が花

を早くに咲かせる理由として、‘It is because Peter wearies for summer and plays that it has come, and the chestnut being so near, hears him and is cheated.’ (19) と書かれていて、こちらは先に挙げたマーラーの『第3交響曲』さながらである。これらは、実際には困難なことと思われることでも、ファンタジーの枠組みの中でなら可能になるような描写の一つであるが、ピーターと言えば笛という印象をこの上ないものにする効果は十分に持っていると言える。

また、「少年ピーター」も、笛は大変得意なようで、しばしば笛を吹いていることになっている。例えば、以下の箇所では、ウエンディやロストボーイズが海賊に捕らえられてしまった緊迫した場面でも、彼は表面的には悠然と楽器を奏でている。

Unaware of the tragedy being enacted above, Peter had continued, for a little time after the children left, to play gaily on his pipes: no doubt rather a forlorn attempt to prove to himself that he did not care. (180)

さて、ピーターの吹く笛であるが、それは一体いかなるものだったろう。上の引用文中では複数形で ‘pipes’ とあるだけで、その他の箇所を見ても笛についての詳しい描写はなく、その形状や音色はよく分からない。そこで、ピーターの彫像や画像を参考にしてみよう。すると面白いことに気づかされる。ピーター・パンなら「パンフルート」もしくは「パンパイプ」を持っているはずだという思い込みがもしあれば、それとは大いに異なる形状の笛をどのピーターも持っていることに驚かされることだろう。ケンジントン公園内にあるピーターの像をはじめとして、多くの場合、ピーターの笛は、先ほどこブグローの絵で指摘した、二又になった笛「アウロス」であることが多いのである。現在この楽器自体を目にすることはあまりないが、古代ギリシャの絵画にはよく描かれている。この楽器は両手で左右の管を持って演奏するようだ。それぞれの管には数個の指孔が開けられていてその開閉で音程を変えられる。管が二本あるので同時に二つの音を出すことができ、簡単なハーモニーを奏でられる。「アウロスは数多くのさまざまな盛儀で吹奏された。ディオニュソスの祭りには欠かせないもので、合唱の伴奏や婚礼、葬儀の際には行列をなして演奏された」ということである。<sup>11</sup>

一方の「パンフルート」は、異なる長さの管を数本横に並べて一体化した幅広の形をしている。古代においては、管の数は「通常七本の筒からなっていた」から「九本あるのは特別上等のものである」由である。<sup>12</sup> 現代の楽器はこれより大型化していて、20数本の管からなっている。管1本につき1音しか出ないから、こちらはもっぱらメロディー楽器である。おそらく両者とも吹き手の技

量によっては多彩な楽曲が奏でられるのだろう。「パンフルート」は、シリックスとも呼ばれている。この呼び方の由来はよく知られていて、「Pan Flute」という趣味的なサイトにはこうある。

パンが妖精シュリックスに恋をしますが、いやがるシュリックスは河辺に逃げ、そこで葦に身を変えて隠れてしまいます。シュリックスを見失ったパンが悲しみにくれ、そこにあった葦を切って笛を作り吹いたのがパンフルートの始まりということになっています。<sup>13</sup>

上記の HP の記述やその他の神話の記述によっても、パンフルート（もしくはパンパイプ）の本来の形状は、何本もの管を横に並べて作るという手間のかかるものではなく、管を単体で用いて作ったものか、二本の管を口元で一つに合わせた形状のものだったのではないだろうか。もっとも、「パンは彼女と他の葦を見分けることができず、手当たりしだい切り取り、今日パンパイプと呼ばれているものを作った」という解釈なら、はじめから沢山の葦を使用し、今日見られるような幅広のものを作ったということになるだろうか。<sup>14</sup>

ピーターが吹く笛はどちらがより相応しいのだろうか。名前からだけなら「当然「パンフルート」を取りたいところだ。しかし、絵や彫刻にした際に、見た目の良いのは伸びやかな形をした「アウロス」の方だろう。様々な絵画でパンやフォーンが吹いている笛や、場合によってはブグローの絵に見られるようにケンタウロスが吹いている笛も、幅広の「パンフルート」ではなく、二又の「アウロス」であることが多いようである。ナルニア国のタムナスも、映画では、この種の二又の笛を奏でていた。<sup>15</sup> バリーの原作から離れて、彼の周辺の画家や彫刻家たちの解釈に依存して考察をしていることになるとはいえ、ピーターの奏でる楽器がパンやフォーンの持つ笛と同じ形状をしている場合が多いことに関しては、彼はパンやフォーンの伝統に則っていると言うことができる。また、仮に、ピーターの吹く笛が「アウロス」であるというのが間違いで、実は「パンフルート」の方であったとしても、ピーターと牧神とのつながりという点において事情は大きくは変わらないはずだ。このようなことにも、ピーター・パンが牧神パンと同じ姓を持つ理由の一端が垣間見られるのである。

## VI

ここまで、バリーの描く二人のピーターについて、劇の上演と小説の出版当時から少し遡った年代にヨーロッパの絵画に描かれた牧神パンやバッカスを検討して来た。また、パンに関わりの深いロンゴスの『ダフニスとクロエ』から

の影響関係について論じて来た。エディンバラ大学で修士号を得たバリーは、おそらくロンゴスは知っていたと思いが、定かではない。また、フランスで芸術活動をしたブグローもミレーも、英国のバリーに直接影響を与えたか否かの確証も今は得られていない。そこで、最後に視点をバリーと同じ英国の文学に移して、当時大いに物議を醸した作品に言及してこの論を締めくくりたい。それは、アーサー・マッケン (Arthur Machen) の書いた、その名も『パンの大神』 (*The Great God Pan*) という中編小説だ。この、怪奇小説の元祖と目される本は、現在でも一部のファンからは絶大な評価を受けているオカルト小説だが、その出版は 1894 年であり、『小さな白い鳥』からは約 8 年さかのぼる。バリーがこの本自体を読んでいたかどうかは未詳だが、仮に読んでいなくとも、そのタイトルだけでも目にしたに違いないことから『ピーター・パン』に何らかの影響を与えたことが想定される。『パンの大神』は、大部な書物ではないが、ここで要約することさえ簡単ではない錯綜した形式と内容を持っている。牧神に取り付かれたと思しき女性が、当代のロンドンで次々に男性を自殺に追いやる状況を探偵小説風書き連ねて行く技法も注目に値する。そして、決定的な描写を控え、読者の想像にゆだねることで、ますます読み手の恐怖心をおおる書き方になっていることなど、いろいろな点で批評の対象になりうる怪作と言って良いものだが、この作品の詳しい分析は他日の課題として、今はそのタイトル『パンの大神』に注意をしたいということである。

更に、作中のある箇所にはバリーの『ピーターとウェンディ』と共通する記述を挙げることもできる。それは、主な登場人物の一人であるヴィリヤーズが、かつての大学の友人で、今は零落しているハーバートが巻き込まれた事件のことを当人から知らされて、以下のように黙考する箇所である。

“No,” he thought, “certainly not the last, probably only the beginning. A case like this is like a nest of Chinese boxes; you open one after the other and find a quainter workmanship in every box. Most likely poor Herbert is merely one of the outside boxes; there are stranger ones to follow.”<sup>16</sup>

この、物語の前半で聞かれる言葉は、小説の後半にかけて現実の物となって行くのである。一方『ピーターとウェンディ』では、物語の冒頭でウェンディの母親ダーリン婦人について述べられた言葉が、これと奇妙なまでに共通しているのだ。それは、彼女の複雑で奥ゆかしい性格をよく表現している次の文言である。

Her romantic mind was like the tiny boxes, one within the other, that come

from the puzzling East, however many you discover there is always one more;  
and her sweet mocking mouth had one kiss on it that Wendy could never get,  
though there it was, perfectly conspicuous in the right-hand corner. (5)

方や事件の更なる展開を予告する禍々しい予兆の言葉であり、方やファンタジーの物語のロマンティックで家庭的な愛情表現に関わる表現である。全く相反する状況で語られる中国（東洋）の小箱の喩えは、それが用いられる文脈が正反対であればある程、読み手の印象に深く刻まれる。タイトルと入れ子の箱の喩えの二点だけでマッケンからバリーへの影響を云々するには少々無理があるということは重々承知しているものの、この二点が両者をつなぐ接点として厳然として存在しているのである。

## 結び

バリーの創作したピーター・パンがなぜ「パン」という姓を持っているのかについて、以上様々に考察を加えて来た。その際の観点は、当時のヨーロッパの、詩、音楽、小説、絵画、バレエなど、様々な芸術の分野でしばしば牧神が取り上げられていたという時流に、彼も大きく影響を受けての結果ではないか、ということであった。とりわけ、フランス絵画のミレーやブグローを中心に検討を加えて来た。また、ピーターのトレードマークの一つとも言うべき彼の奏でる笛についても考察してみた。更には、英国の小説、マッケンの『パンの大神』にも言及し、タイトルと内容の一部がバリーに影響を与えたのではないかとの推定を述べた。その結果、全体として浮かび上がって来たのは、ピーター・パンの姓の由来としては、これらの作品からの何らかの影響があったに違いないという印象が更に強められたということである。

とはいえ、これはあくまでも印象に過ぎないということもできる。今後の課題としては、より個別具体的に、各芸術家なり作品なりからのバリーへの影響を、当時の情報伝達のあり方も含めて、仔細に調査することが挙げられよう。それには、例えば、作者バリー自身の行動の履歴を探るといような地道な作業も必要になるだろう。また、時代の雰囲気として牧神の流行ということを取り上げたが、それがなぜ起こったかということに関する文化史的な考察も必要とされるだろう。いずれにせよ、ピーター・パンの姓がパンであることを研究課題に取り上げることによって、いろいろなことを考察したり推定したりできるということは事実であり、その意味では、バリーの創作は、我々に様々な検討課題を与えてくれていると言っても過言ではないのである。



## 註

- 1 ジェイムズ・マシュー・バリー『ピーターとウェンディ』第3章、89頁。  
テキストは、James Matthew Barrie, *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy* (Oxford: Oxford UP, 1991) を用い、以下の引用は、本文中の括弧内に頁数を記す。演劇版の『ピーター・パン』の第1幕でもこれと同様のやり取りが交わされる。

WENDY . . . What's your name?"

PETER (*finding it lamentably brief*) Peter Pan.

WENDY Is that all?"

PETER (*biting his lip*) Yes.

WENDY (*politely*) I'm so sorry. (I. I)

*Peter Pan and Other Plays* (Oxford: Oxford UP, 1995), 98.

- 2 『世界の幻想文学・総解説』（自由国民社、1993年）、165頁。
- 3 ピーター・ミルワード『童話の国イギリス』（中央公論社、2001年）、229頁。
- 4 「辞書」バージョン 2.2.1 (143.1) 2005-2011 Apple Inc.
- 5 *Merriam-Webster's Encyclopedia of Literature*, 1995.
- 6 アラン・ダニエル著、窪田般彌・小林正巳訳『ファロスの神話』（青土社、1996年）、96-97頁。
- 7 Ann Yeoman, *Now or Neverland: Peter Pan and the Myth of Eternal Youth: A Psychological Perspective on a Cultural Icon* (Toronto: Inner City Books, 1998), 11.
- 8 『楽しい川辺』の前後の、牧神を扱った英文学の作品群については、以下を参照。Monique Chassagnol, 'Masks and Masculinity in James Barrie's *Peter Pan*' in *Ways of Being Male: Representing Masculinities in Children's Literature and Film* (New York: Routledge, 2002)
- 9 『世界美術大全集 21 レアリズム』馬淵明子責任編集（小学館、1993年）、156頁。ブグローには『ニンフとサテュロス』（*Nymphes et un satyre*, 1873年）や『ヴィーナスの誕生』（*La naissance de Venus*, 1879年）など、牧神やその他のギリシャ・ローマの半獣神を描き込んだ多くの絵画があり、それぞれが19世紀の人々の古代の神話に対するイメージの醸成に深く関わっていると思しい。
- 10 『世界美術大全集 21 レアリズム』、81頁。
- 11 マックス・ウェイド=マシューズ著、別宮貞徳監訳『世界の楽器百科図鑑』

- (東洋書林、2002年)、172頁。
- 12 ロングス、呉茂一訳『ダフニスとクロエー』(角川書店、1951年)、146頁。
- 13 中村淳、「the History of Pan Flute」  
<<http://home.riise.hiroshima-u.ac.jp/~momoe/AN/rekisi.html>>
- 14 タムナスの笛は「アウロス」とは多少形が違い、管の途中から二又に分かれている。映画独自の小道具であろうか。
- 15 『世界の楽器百科図鑑』、173頁。
- 16 ‘III. The City of Resurrections’ The Project Gutenberg EBook of *The Great God Pan*, by Arthur Machen, <<http://www.gutenberg.org/files/389/389-h/389-h.htm>>

### 参考文献

- Barrie, James Matthew. *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- . *Peter Pan and Other Plays*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Chassagnol, Monique. ‘Masks and Masculinity in James Barrie’s *Peter Pan*’ in *Ways of Being Male: Representing Masculinities in Children’s Literature and Film*. New York: Routledge, 2002.
- ダニエル、アラン著、窪田般彌・小林正巳訳『ファロスの神話』東京：青土社、1996年。
- 「辞書」バージョン 2.2.1 (143.1) 2005-2011 Apple Inc.
- 馬淵明子責任編集『世界美術大全集 21 レアリスム』東京：小学館、1993年。
- Machen, Arthur. ‘III. The City of Resurrections.’ The Project Gutenberg EBook of *The Great God Pan*. 23 March 2013  
<<http://www.gutenberg.org/files/389/389-h/389-h.htm>>
- Merriam-Webster’s Encyclopedia of Literature*, 1995.
- ミルワード、ピーター著『童話の国イギリス』東京：中央公論社、2001年。
- 中村淳、「the History of Pan Flute」2013年3月23日  
<<http://home.riise.hiroshima-u.ac.jp/~momoe/AN/rekisi.html>>
- 『世界の幻想文学・総解説』東京：自由国民社、1993年。
- ウェイド＝マシューズ、マックス著、別宮貞徳監訳『世界の楽器百科図鑑』東京：東洋書林、2002年。
- Yeoman, Ann. *Now or Neverland: Peter Pan and the Myth of Eternal Youth: A Psychological Perspective on a Cultural Icon*. Toronto: Inner City Books, 1998.